



対談相手

峯川 大

市長 対談

のろし 共同代表、NPO法人いちほら市民活動協議会 理事、
ウエルコミ・コーディネーター

みねがわ ひろし
峯川 大さん

TALK THEME

“ひときらめく”まちづくり

地域活性化団体「のろし」を設立し、市外に住みながら、若者と地域をつなぐ活動やウエルコミの運営に携わる峯川さんを迎え、「ひときらめくまちづくり」について対談しました。

※ウエルコミ=ウエルシア・コミュニケーションセンターいちほら



市原市長

小出 譲治

地域と若者をつなぐ

峯川 私が2017年に設立した「のろし」は、市内外に住む20代・30代の若者を中心に活動している団体です。山小川から始まり、現在も鶴舞を主な活動場所として地域の課題解決を目指しています。こんなイベントができたらいいなという声もやもやと煙のように上がってくる様子から「のろし」と名付けました。

市長 関係人口という言葉がありますが、まさにその最先端にいますね。市原市は、日本の縮図といわれており、課題も縮図。過疎地域の住人にとって、諦めの地域になってほしくなかった。のろしの活動は非常に心強いです。

峯川 鶴舞の方たちも地元に着と誇りを持っています。若者たちもいろいろなことをしたいというエネルギーがある。地元の人と若者をつなぐ役目を自分たち「よそ者」ができればいいと思います。

市長 どのように若者を巻き込むのですか。

峯川 ホームページに、具体的な活動を掲載します。例えば、鶴舞小学校の児童と一緒に作る「竹アートプロジェクトメンバー募集」と載せたときは、アートや教育に興味のある社会人が申し込んでくれました。私たちは、地域の困っていることと自分のやりたいことを掛け合わせたものを「福業」と呼んでおり、いつもメンバーと福業となる取り組みを考えています。

やりたいから生まれた「はたトロ」

峯川 「はたちトロッコ(はたトロ)」は、

市原出身が在住の20歳の人たちを小湊鐵道のトロッコ列車に招待して、養老溪谷駅までの旅を楽しんでいただく企画です。企画が生まれたきっかけは、鉄道好きのメンバーが自分の成人式がコロナで中止となったことから、「トロッコで成人式をやりたい!」と始まったんです。

市長 自分の「やりたい」を実現するって素晴らしいですね。

峯川 これこそ「福業」でした。肝心なのは、その後。毎月第3土曜日を「はたトロ」参加者の活動日とし、南部地域でさまざまなテーマの活動をします。それを通じ、少しずつ市原のことを知ってもらい、魅力に気付いていく。そして、地元に着する若者を増やしていきたいという思いでやっています。

市長 若者だけでなく大人も養老溪谷に行ったことがない人が多いと思う。このように知る機会を作ってもらい、本当にありがたい。

峯川 このようなきっかけづくり、今までは行政がやっていましたが、これからは民間や市民レベルの活動が盛んになっていくというのがとても大事です。

市長 行政がなんでもやるという時代ではなくなった。できることも限られてくるし、公民連携の担い手となる市民を増やしていきたいですね。

峯川 次回は、8月のお盆の時期に15～25歳を対象にして、トロッコを運行する予定です。今後、長く続けて市原の新しい風物詩にしたいですね。

ひときらめく場所「ウエルコミ」

市長 峯川さんは昨年オープンしたウ

エルコミでも活動されていますね。

峯川 ウエルコミ利用者はすごくキラキラしているんです。次はこんなイベントをやりたいと言ってもらえると、すごくうれしい。

市長 峯川さんの取り組みは、自然に生まれてくる。課題があって、解決のために作るというのも大事だけど、自然発生的に生まれるものも魅力的です。

峯川 その方が、誰かに言われてやるではなく、純粋に自分の興味、思いで進んでいける。そういう人たちは周りから見ると、キラキラしていると思う。“ひときらめく”ですね。そういうまちになっていくお手伝いを今後もしていきたいです。

対談を終えて

市長 私は、多くの人に市原市への愛着と誇りを感じてほしいと思っています。峯川さんの取り組みは、まさに地域の誇りと若者の郷土愛を目覚めさせている。これからも手を携えて“ひときらめく”いちほらを創っていききたいと思います。



8月開催予定の市原はたちトロッコの参加申し込み、過去の活動など詳しくはこちら▶

